



中学生の部

「奇跡」

長洲中学校 二年 福田 大耀(駒通)

四月、熊本を大きな地震が襲いました。その時僕は、当たり前前の事が当たり前にできること、命があることは奇跡だと感じました。そして、この瞬間を大切に生きていかねばならないと強く感じました。

皆さんは、今この瞬間を大切に生きていますか。

地震があった日は、サッカークラブの練習で熊本市内にいました。練習をしていると、「グラグラ、ドーン」と地面が踊り始めました。一瞬のうちに電線が切れ、青い光が空に放たれました。立ってられないほどの強い揺れがグラウンドを襲いました。友達の中には恐怖のあまり泣き出す人もいました。生まれて初めて、「死ぬかも…」という恐ろしさで体が震えました。明日から

サッカーができなくなるのではないかと、学校の友達に二度と会えなくなるかもしれないと考えました。揺れが収まっても、僕の心臓はドキドキしていました。「生きていてよかった。」と思いました。

僕のいとは、益城町に住んでいました。益城町の中でも一番被害のある地区でした。一度目の地震では全ての物が倒れ、家はひどい状態になっていました。一度目の地震の後、母が片付けに行き、何とかきれいになりました。しかし、その二日後の大きな地震の後の連絡では、家や地区全体がさらにひどい状態になってしまったという話を聞かされました。水が出なくなり、電気が使えなくなり、食料がない状態でした。そこで、水と食料を届けに益城

町に行きました。町の風景を見ると、ついこの前までサッカーをしていた場所や、遊んでいた場所が跡形もなく無くなっていました。ショックで呆然となりました。

いとは避難所にいました。避難所に行くとき、たくさんの人たちが建物の中や外、駐車場で避難生活をされていました。いとは、お風呂にも入れず、満足な食事もとれずになり落ち込んでいました。それを聞き、自分が何もできなかったことをとても悔しく思い、情けなくなりました。

また、サッカークラブの友達も生活が苦しいと連絡を何度ももらいました。そこで、僕は家のお風呂に入ってもらうことにしました。僕にできることはそれしか思いつきませんでした。友達は、「学校に行きたい。」と心から話していました。そして、僕が学校に行っていることをすぐうらやましがっていました。学校に行っていることや、当たり前前に生活していることが実は当たり前なことではない幸せなことだったと実感しました。すぐ身近に

と言ったそうです。

また、あるご夫婦からは、「遠くからご苦労様です。助かります。ありがたいです。」

と何度も頭を下げられたそうです。「どちらの方も、自分の家は住めないぐらいに壊れてしまって、大変な思いをされていたのに、私たちにあたたかい言葉をかけてくれてね。本当は私たちが元気をあげないといけないかったのに、反対に元気をもらった気がしたよ。」

とお母さんは話してくれました。わたしはその話を聞いて、自分にも何かできないだろうか考えました。わたしはまだ子どもなので、ボランティアに行くことはできません。でも、子どもにもできる二つのことを思いつきました。

まず一つ目は、募金です。この前お父さんとセブンイレブンに行ったとき、熊本地震の募金箱が置いてありました。わたしは自分のお小遣いの中から百円募金しました。

わたしの百円が、困っている人たちにどう役立つのかはわかりません。もしかすると、百円ぐらいでは何もできないのかもしれませんが、一人ひとりの力はとっても小さくても、その力がたくさん集まれば大きな力になる

いる人が、当たり前前の生活を送ることができない姿をとっても悲しく感じました。いとこや友達から当たり前前のができる大切さを強く教えて貰いました。

たくさんの方の被害を受けた熊本地震から私たちが学ばなければならないことは、当たり前前のが出来ることに感謝すること。一つの命があることは奇跡であること。そして、今この一瞬を大切に生きることだと思います。

それを自分に置き換えるならば、大好きなサッカーが出来ることや家族やクラスの仲間と楽しく過ごせることに感謝することであり、毎日を大切に生きることだと思います。また、この地震で助かった命なのだから、一瞬一瞬を無駄にせずに、命の重みを感じながら生きていくことだと思います。

これからは、被災地の方の思いや頑張りを受け止め、今この一瞬を大切に、感謝を忘れずに生きていきます。それが僕にできる、僕がしなければならぬ第一歩だと思います。

と思います。

次に、二つ目はお手紙です。今回の地震で、去年までわたしの学校にいらっしやった先生が被害にあわれたと聞きました。そこで、クラスで励ましのお手紙を書きました。わたしはその先生を少しでも元気づけようと、一生懸命文面を考え、絵なども書きました。もしわたしが被災していたら、そういうお手紙はとっても嬉しいと思います。

「熊本地震」でたくさんの方の被害が出て、たくさんの方が犠牲になりました。それはとても悲しいことですが、それでも私たちはこの地震から学んでいかなければならないと思います。わたしが一番大切だと思ったことは、被災された方を助けるために、多くの方が見せてくれた思いやりの気持ちです。いつもの生活の中で、みんながこの思いやりの気持ちを持つことができれば、誰かが嫌な気持ちになることも、けんかになることもないと思います。

今回の地震のために、まだまだたいへんな思いをされている方はたくさんいらっしやいます。わたしは、思いやりの気持ちを大切にしながら、これからも自分にできることで支援をしたいと思います。



小学生の部

「地震から学んだこと」

清里小学校 六年 井上 日暖(建浜)

その時わたしは家族でテレビを観ていました。突然、家中がガタガタと激しく揺れました。何が起こったのかわからず、わたしはテーブルの下に隠れました。お母さんはテレビを押さえていました。いつまでこの揺れは続くのだろうととても不安でした。

長い時間が過ぎ、ようやく揺れがおさまった後は、家族でニュースを見ました。あんなに真剣にニュースを見たのは初めてでした。

四月十四日に起こったこの「熊本地震」は、次の日の夜中、わたしが寝ている時にもまた起こりました。それからしばらくはまた揺れるのではないかと毎日心配でした。こんな大きな地震を経験したのは初めてでした。

この「熊本地震」では、わたしたちの住む長洲町でもあんなに激しく揺れましたが、益城町や熊本市内の方はもっともつとひどかったそうです。わたしは、テレビでたくさんさんの家や道や橋が壊れている映像を見て、とても悲

しくなりました。でも、それと同時に、自衛隊の方や消防士の方、警察の方、ボランティアの方、いろんな分野の専門の方など、たくさんの人たちが協力して、励ましのコメントや物資の提供などの救助活動を行っている姿を見て、とても感動しました。

わたしのお母さんは歯科衛生士をしています。先日も益城町に支援活動に行きました。益城町総合体育館で、被災している方々一人ひとりに声をかけ、お口のことや、他に困っていること、足りないものなどはないか、聞いて回ったそうです。

そこで、びっくりすることがあったと言っていました。それは、あるご家族とお話をした時のことです。お母さんが、
「歯磨き粉使ってください。」
と言って歯磨き粉を渡そうとしたら、なんとその人は、
「わたしたちよりもつと困っている人にあげてください。」